



Title	間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション：使用例の検討と、尻上がりイントネーション、半疑問イントネーションの考察
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化研究. 2018, 44, p. 283-306
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/68025">https://doi.org/10.18910/68025</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション —使用例の検討と、尻上がりイントネーション、半疑問イントネーションの考察—

郡 史 郎

## Intonation of Japanese Interjection Particles and Sentence-internal Interjectional Intonation: Exemplification of the Use with Speech Data

KORI Shiro

**Summary:** This paper examines the usage of intonation of interjection particles and sentence-internal interjectional intonation in Japanese in various types of speech materials such as historical conversation recordings and prepared speeches. Particular attention is paid to the origin of the now prevailing “shiriagari” intonation (non-lexical sentence-internal rise-fall) and “semi-interrogative” intonation (sentence-internal continuous rise).

キーワード：間投助詞，尻上がりイントネーション，半疑問イントネーション

### 1 はじめに

この稿は、文中の文節末と単語末でのイントネーションの使い方について、実際の使用例を見ながら考察することを目的とする。対象は東京など首都圏中心部の話し方である。

文中の文節末に（橋本文法式の）間投助詞や特別なイントネーションを付けることは、中立的な情報伝達には必要ない。しかし、あえてそれを使用する意義と型の使い分けの原理について、郡（2016）で以下を報告した。（1）間投助詞は短い無音調（意図的に上げも下げも伸ばもしない、つまり自分独自の動きを持たない無色のイントネーション）以外のイントネーションとともに使われるのが常であるが、間投助詞を文節末に付けることと、短い無音調以外のイントネーションを間投助詞なしで文節末に付けること（間投助詞的イントネーション）は働きとして近く、その文節の文法の特徴やイントネーション型の使い方に共通性がある。（2）文節末でよく使われる上昇下降調と強調型上昇調のうち、前者は発話への注目要求機能が強く、言いよどみ、心内での情報処理、モニタリングといった発話計画にかかわる作業の進行状況をあらわす働きも強い。（3）イントネーション型の使い分けには、間投助詞の有無、文法的切れ目の大きさ、談話構造、話し手の世代、対話者との関係やフォーマルさ、話し手の性別といった要因もからんでいる。つま

り、そうした情報をあらわす手段にもなっている。特に、(4) 1970年あたり以降の生まれの世代では、それ以前に比べて間投助詞の使用が少なく、間投助詞的イントネーションの使用、特に上昇下降調の使用が多い。そして、(5)「引用節」を例外として、どちらも従属度が中以下という大きな文法的切れ目になっている従属節の最後に多く使われており、間投助詞なしの場合だと型としては上昇下降調の使用が顕著に多い。また、(6) イントネーション型の使い分けには、それぞれの型の一般的な性格だと理解できる部分がある。そして、上昇下降調は、間投助詞でも間投助詞的イントネーションでも上昇が4.5半音以下という小さいものが多く、強調型上昇調は間投助詞的イントネーションでは上昇が小さいものが多いことも述べた。

本稿ではイントネーションの型ごとに用例を検討し、考察を加える。その際、文節末だけでなく、文節内の単語の末尾に見られる音の上がり下がりも間投助詞的イントネーションとして考察対象に加える。「あと高型プロミネンス」と「半疑問イントネーション」はその一種である。さらに、「半疑問イントネーション」の機能と成立経緯についての私見と、「尻上がりイントネーション」の成立についての私見も付け加える。

## 2 音声資料と音声記述の方法

用例採集の対象としたのは、次の11種類の主に平成期の会話音声<sup>1)</sup>とその他の平成期のテレビやラジオでの談話音声、そして会話と演説を含む昭和期までの談話音声資料である。

①～⑦：テレビ朝日のトーク番組『徹子の部屋』から、首都圏中央部成育の幅広い年齢層をゲストとする7放送回分。ゲストは1名(①)以外はいわゆる芸能人で、具体的には、黒田初子(①1903f, 1994年3月)、中村メイコ(②1934f, 1989年8月)、忌野清志郎(③1951m, 2002年4月)、野村宏伸(④1965m, 1989年12月)、相田翔子(⑤1970f, 2005年8月)、大野智(⑥1980m, 2014年4月)、堀北真希(⑦1988f, 2013年12月)の各氏(括弧内は資料番号、話者性別、生年と放送時期)。ホストは黒柳徹子氏(1933f)。会話の内容は、ゲストが出演したテレビドラマや映画に関する話、子供のころや若いころの逸話、家族の話など。それぞれ約25～35分。

⑧：国立国語研究所(2002)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第6巻 東京・神奈川』に収録の、東京下町方言話者で1911年生まれの男性と1907年生まれの女性による会話。1980年収録。会話の内容から判断すると、話し手は親しい知人どうしと思われる。昔の行事を主な話題とした会話。約35分。

⑨：1972年生まれで世田谷区育ちと横浜市育ちの女性で、親しい友人どうしによる独自収録の会話。内容は、テレビドラマや映画、小学生から高校生までの頃の経験や最近の経験を

1) 郡(2015a)で分析の対象としたのは、このうちの①から⑩からそれぞれ約12分の区間を選び、合計約120分とした資料である。

話題とした雑談と、クイズを共同で解く場面の会話。2009年収録，約85分。

⑩：1986年生まれの市川市育ちの男性と1987年生まれの府中市育ちの女性で親しい友人どうしによる独自収録の会話。内容は、クイズを共同で解く場面の会話。2008年収録，約60分。

⑪：1986年生まれの世田谷区育ちの男性と1986年生まれの多摩市育ちの女性で親しい友人どうしによる独自収録の会話。内容は、『名探偵コナン』のひとつのエピソードについて、女性は話を途中までしか知らないで、その全部を知っている男性にストーリーの解説を求めている会話と、クイズを共同で解く場面の会話。2008年収録，約70分。

用例では、資料番号、話し手の生年と性別がわかるように、上記の11種類の会話音声資料については「⑩1987f」という形で記す。それ以外の資料についても、生年がわかる話し手については「[1987f]」のような形で示す。

高さの動きの記述の枠組みは、文内イントネーション（アクセントの実現度の強弱）については郡（2003）、末尾イントネーションについては郡（2015a）とその改訂版である郡（2016）のものを用いる。用例は表音カナで表記し、以下の記号を高さ変化の開始点にもっとも近いところに付ける。「：アクセントによる上げ、∩：アクセントによる下げ、||：イントネーション句の切れ目、/：ポーズ、↗：疑問型上昇調（連続的上昇）、↑：強調型上昇調（段状上昇）、→：平坦調、↘：上昇下降調、↓：急下降調、p：音の上がり方が小さい、f：音の上がり方が大きい<sup>2)</sup>。

イントネーションの記述は音声処理アプリケーションPraatのピッチの表示、狭帯域スペクトログラムの視察と聴覚判断を併用しておこない、母音の長短とポーズの有無の判断は聴覚によった。以下、間投助詞がある場合とない場合に分けて述べる。

### 3 間投助詞のイントネーションの実態

郡（2016）では、120分の会話資料における文中の文節末のイントネーションについて、型別の使用状況を間投助詞の有無別にまとめた。これをあらためて表1に示しておく。

2) 末尾のイントネーションのpは上昇量が4.5半音以下、fは上昇量が9半音以上であることとした。4.5半音きざみで大きさを分類するのは、当該文節にアクセントの下がり目がある場合についての経験的な基準である。しかし、同じ上昇量でもその文節のアクセントが平板型だと上昇は大きく感じられるし、文全体の高低変化が小さい発音の場合も同様である。つまり、上昇量の大小は本来相対的なものである。しかし、末尾のイントネーションは1語文に付くことが多く、またアクセントの動きを消した上で付くことがあり、そうした場合は上昇量の大小について相対的な評価が困難である。そのため上記のような絶対的な基準を使うことにした。ただ、pとfは文中でのアクセントの上昇の大きさについても使っており、それは前後との関係を考えての相対値である。結果的に二重基準になっているが、ここではこの形にする。



表1 イントネーションの音声的型の出現度数（郡 2016）  
括弧内は短い無音調を除いたもののうちの割合

	疑問型 上昇調	強調型 上昇調	平坦調	上昇下降調	急下降調	長い 無音調	短い 無音調	不明	合計
間投助詞 付き文節	25 (6%)	172 (44%)	2 (1%)	159 (41%)	24 (6%)	5 (1%)	9	2	398
間投助詞 なし文節	14 (2%)	132 (15%)	10 (1%)	350 (38%)	12 (1%)	392 (43%)	6866	0	7776

表からわかるように、この資料では検討対象の文節総数8174のうち間投助詞類が付く文節は398で5%に過ぎないが、それでも平均すれば約18秒に1回は使われている計算になる。ただ、現代の中年層以下では、上の世代に比べて使用が相対的に少ない。形は「ね」が圧倒的に多く(85%)、「さ」がそれに次ぐ(13%)。残りは「ですね」7例、「な」2例、「だな」1例だった。

間投助詞は、助詞としての高さの接続の型は「ね」も「さ」も順接である。「ですね」は「もよちゃんがですね…」[モ「モヨチャンガ」デス↑pネー] (③1933f)のように、格助詞のあとでは低接する形で使われる。

次に、イントネーションの型ごとに実例を見てゆく。「ね」と「さ」は分けない。実際の高さの動きを示す図と、用例に対する補足説明を必要に応じて付ける。図の見方は、縦軸が高さで、上の方ほど音が高いことをあらわす。縦軸の目盛は50Hzをベースとする半音値である。横軸は時間の経過で、目盛は秒である。

### 3.1 疑問型上昇調の間投助詞

郡(2016)の120分の会話資料では、間投助詞の疑問型上昇調(↗)はすべて女性の話し手のもので、「ね」に付く形で親しい相手に対して使う傾向が顕著だった。

裸の文末だと、疑問型上昇調は答えを求める質問で使うほか、必須ではないが、呼びかけ(「もしもし」[「モシモシ」])や依頼(「待って」[「マッテ」])での使用のように、聞き手の反応を待つ働きがある<sup>3)</sup>。間投助詞があれば質問だと誤解されるリスクは低いので、相手の反応を待つ言い方にするだけで、断定的で一方的な「きつい」言い方でなく、口調をやわらげた「やさしい」言い方になり、同時に、会話がより協働的なものになると思われる。

女性の方が上昇調の使用が多いということは以前から言われている<sup>4)</sup>。これは、男性よりも女性の方が非協調志向が弱い傾向があること(登張真穂他 2015)で説明できそうである。

3) 筆者の現在の考えでは、助詞が付かない文末での疑問型上昇調の働きは、④答えを求める、⑤反応を待つ、⑥自分が思っていたことと違うという気持ちをあらわす、の3つに大別される。④だけでなく⑥も以前からあったことは、神保格氏(1929)の日本語発音の説明からもわかる。

4) 宇野義方氏(1955, p.30ff)と大石初太郎氏(1965)の調査報告でも確認されている。

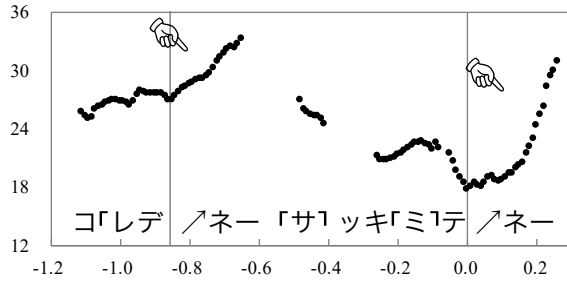


図1 疑問型上昇調の間投助詞「ね」

例 || コ「レデ / ネー || / || 「サ「ッキ || 「ミ「テ / fネー || (〈情報誌を見ながら) これでね、さっき見てね…: ⑨1972f2) 【図1】

### 3.2 強調型上昇調と平坦調の間投助詞

強調型上昇調(↑)と平坦調(→)は、この次に説明する上昇下降調・急下降調と並んで間投助詞によく使われるイントネーションである。長い場合も短い場合もある。なお、本稿で言う平坦調とは文字どおり平坦な高さを保つもので、発音動作の点でも機能の点でも強調型上昇調の一形態と言える(郡 2015a)。

例 1. || 「ダ「ッテ || ア「ノー コー「ローカノ ↑ネ / 1エー「pス「ミッコー || 「エンノ「シタノ「pス「ミッコ「pナ「ゾフ || (だって、あの、こう、廊下のね、えー、縁の下の隅っこなぞは…: ⑧1911m) 【図2】

2. || タ「fマニ「ワ ↑ネ || / || 「コーヤッテ ↑ネ || / || 「ナ「ンカ ↑fネ || / || 「ラ「フニ ↑fネ || / || ヤ「ル「ノモ ↑ネ || / || タ「fノ「シ「ーデス「fネー || (たまにはね、こうやってね、なんかね、ラフにね、やるのもね、楽しいですね: 1994年10月18日, NHK FM『ミュージック・スクエア とおきチューズデイ』での谷村有美氏 [1967f])

3. || 「ビ「デオ || 「ト「ッテ →ネー ナンカ || 「ミ「タリ || 「ミ「ナカッタリ || シ「テル「ケ「pドー || (〈番組は) ビデオとってね、なんか見たり見なかったりしてるけど: ⑨1972f1)

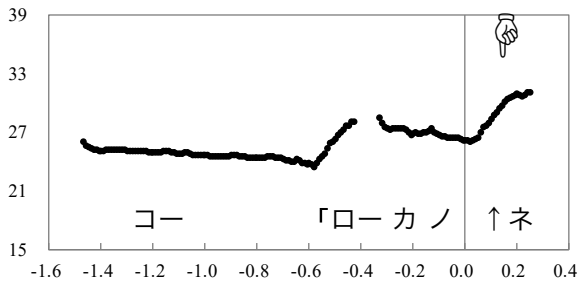


図2 強調型上昇調の間投助詞「ね」

### 3.3 上昇下降調と急下降調の間投助詞

上昇下降調（↑）やその変種である急下降調（↓）を間投助詞に付けると、自分の話をよく聞いてほしいと思っているように聞こえ、考えながら話している感じも強くなる（郡 2016）。ただ、これは中年層以上が使うものというイメージが、少なくとも 1980 年代以降に生まれた層にとってはあるようだ（郡 2017: 上昇量が大きいほど使用者の推定年齢が上がる）。実際、下の 3 例目のように明治時代の使用が確認できる一方、1970 年代以降に生まれた世代では使うことが少ない（郡 2016）。

- 【例】 1. || ス「マ<sup>↑</sup>イルジャ「pナ<sup>↑</sup>クテ || 「モー イ<sup>↑</sup>ッコ「pナ<sup>↑</sup>ンカ<sup>↑</sup> pサー || 「ナ<sup>↑</sup>ンダツケ ||  
 （スマイルじゃなくて、もういっこ、なんかさ、なんだっけ：⑨1972f1）【図 3】
2. || ア「レネ↓ー || / || ク「ラ<sup>↑</sup>イノ || / || オ「モ<sup>↑</sup>イノ ス「pゴ<sup>↑</sup>イ || （あれね、暗いの、重い  
 の、すごい：⑨1972f2）
3. || サ「ク<sup>↑</sup>ジツ<sup>↑</sup> pネー || / || ウ「チノ || オ「タ<sup>↑</sup>マサント<sup>↑</sup> pネー || / || オ「エ<sup>↑</sup>ーサン  
 ガ<sup>↑</sup>ネ || / || パ「ノラマカラズーット<sup>↑</sup> pネー || ハ「fクラ<sup>↑</sup>ンカイノ「pケンブツニデ  
 カケタ（???） || / || 「ソーシタトコロ<sup>↑</sup>ガ<sup>↑</sup>ネー || / || ヤ「リツケ<sup>↑</sup>ナイ || 「fヨーフク  
 デイッタ<sup>↑</sup>ッテモンデ（…） || （昨日ね、おたまさんとおえいさんがね、パノラマからずっとね、  
 博覧会の見物に出かけた（…）。そうしたところがね…：岩間くに氏 [1858f] による 1900 年の録音<sup>5)</sup>,  
<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1311164r> [清水康行 2011 参照]、ポーズの部分には男性の聞き手の  
 あいづちが入っているが省略した。)

### 3.4 複合イントネーションの間投助詞

上昇下降調または急下降調のあとに、疑問型上昇を続けるか、あるいは強調型上昇を続けるという複合イントネーションが間投助詞に付くことがある<sup>6)</sup>。後半部の上昇は、小さいことも小さくないこともある。ただ、使う人は限られている。本稿で検討した会話資料では、使っているのは⑧の 1907f（ね）と⑩の 1986f（ね、さ）の女性 2 人だけである。

- 【例】 1. || ウ「チ<sup>↑</sup>デワ<sup>↑</sup> pネー↑ pー || 「ヤッテマ<sup>↑</sup>ス<sup>↑</sup>ゾー || （〈年越し蕎麦は今やらないだろうと聞  
 かれて〉うちではね、やっていますよ：⑧1907f）
2. || ウ「ラ<sup>↑</sup>ニ「pデ<sup>↑</sup>テクルヒ「pト<sup>↑</sup>ガ<sup>↑</sup> pサー<sup>↑</sup>ー || / || ソ「レ<sup>↑</sup>ゾレ || チ「ガ<sup>↑</sup>ウカラ  
<sup>↑</sup>サー<sup>↑</sup>ー pー || （裏に出てくる人がさ、それぞれ違うからさ…：⑩1986f）【図 4】

5) 約 75 秒の会話で 12 例確認できる間投助詞のほとんどが「ね」で、強調型上昇調もあるが、多いのは小さい上昇下降調である。

6) 川上泰氏 (1963) の伝聞では、文中か文末か不明だが、1950 年代半ばに [ネ「ー」ー「ー」という上昇下降調のあとに疑問型上昇調を続けたとおぼしいイントネーションが「女の子」の新しい言い方として認識されていたようだ。しかし、1947 年の NHK の藤倉修一アナウンサー [1914m] の発言に「あのね」[アノ<sup>↑</sup>ネ<sup>↑</sup>フー] がある（『街頭録音「ガード下の娘たち」』[NHK CD 音でつづるアナウンサーたちの 70 年] 1993）。

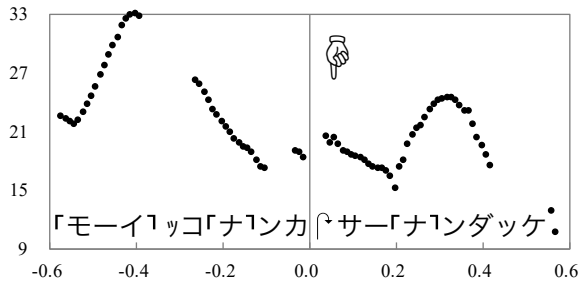


図3 上昇下降調の「さ」

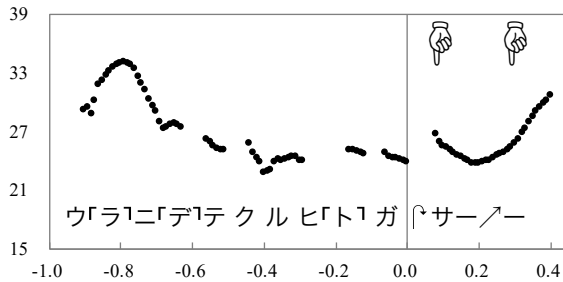


図4 複合イントネーションの「さ」

#### 4 間投助詞がない文節の末尾のイントネーションの実態

間投助詞がないときは、文の中の文節の最後は、最後に特別な高さの動きも付けず、伸ばしもしない言い方、つまり短い無音調で言うことが圧倒的に多い。しかし、それ以外のイントネーションを特に文法的に大きな切れ目に付けることがある。表1で見ると、郡(2016)の会話資料では無音調以外のイントネーションが末尾に付く文節は910、つまり検討対象の文節総数の11%で、約8秒に1回使われていることになる。多いのは長い無音調、上昇下降調、次いで強調型上昇調である。特に、現在の中年層から下の人は、間投助詞をあまり使わない傾向があり、間投助詞がないところでも短い無音調以外のイントネーションを付けることが増えている。

こうした話し方では、イントネーションをあたかも間投助詞の代わりに使っているかのようである。そこで、これを**間投助詞的イントネーション**と呼ぶ。ただし本稿では、文節末だけでなく文節内の単語末での音の上がり下がりもこれに含める(理由は後述)。

一般に、(短い無音調以外の)間投助詞的イントネーションの働きは、間投助詞の働きと非常に近い(郡2016)。つまり、ひとつには、文はまだ未完成だけれども、そこが大きな意味の切れ目だということをはっきりさせる印である。そして、自分はそのあとに言う内容や言い方を考えるのに手間取っているときにも使う。さらに、間投助詞的イントネーションは自分の話をしっかり聞いてほしい気持ちがあるときにも使う。

郡(2016)では述べなかったが、このほかに、いくつものことを列挙するときの使い方もあ

る。これは間投助詞にはない使い方である。

また、文節末でなくても、文節の内部の単語末、つまり助詞（1拍）の直前を長い無音調で引き伸ばしたり、強調型上昇調や疑問型上昇調を付けることが時としてある。強調型上昇調を付けるのは以前から「あと高型プロミネンス」と呼ばれていたものの一種であり（4.2.3節）、疑問型上昇調を付けるのは「半疑問イントネーション」である（4.4.2節）。筆者は郡（2016）の段階では、これらを間投助詞的イントネーションと別物と考えて考察対象から外していたが、その一種と考える方がイントネーションの全体像の中での位置づけとしてふさわしいと考えるに至った。そのため、本稿ではこれらも考察対象に含める。そのことで名称としてやや問題が生じるが、とりあえずこれらを含めて「(文節末・単語末での) 間投助詞的イントネーション」としておく。

#### 4.1 長い無音調の間投助詞的イントネーション

表1からわかるように、会話での長い無音調は、間投助詞のない文節末では、短い無音調を除くといちばん多い。無音調には特別な記号は付けなくてよい。

文節の中の単語末で音を伸ばす例が下の3例目の「正解」であるが、ここには示さない他の用例を見ても、そのあとに言う内容や言い方を考えるのに手間取っているための延伸と解される。

- 例 1. || 「デ↓ー / 「モー ヒト1リー / ナ「カイキ1ーチガ「デ1テキ↑ fテー || (で、〈そのテレビドラマには〉もうひとり中井貴一が出てきて… : ⑨1972f2) 【図5】
2. || ソ「ノ カ1ン1ー / 「pアンマリー || [相手: 「ヤヤッコシー コト || ユ「ワナイカラ↑ネ || イ「ワネー↑ネー || (その間、あんまり [やっこしいこと言わないからね] 言わないね : ⑧1911m) 【図6】
3. || 「デ1モ || 「タ1ブン || ソ「レデセーカイ1ーナ1ンダト オ「pモ1ー ア「pノ ヤク1ワ || (〈ドラマの配役について〉でもたぶんそれで正解なんだと思う、あの役は : ⑨1972f2)
4. || 「ワ1ガ || ニッ「ポ1ンワ1ー || / || ユ「ーマ1デモ「pナ1ク || / || カ「ゾク↑テ1キコッカデアル || (我が日本は、言うまでもなく家族的国家である : 高田早苗氏 [1860m] の1929年の

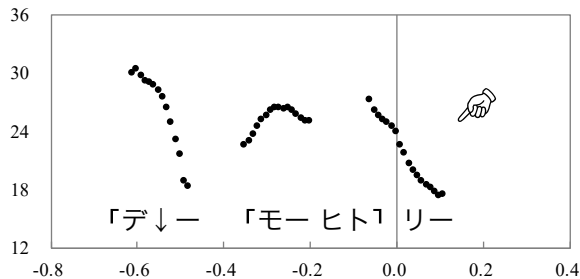


図5 長い無音調の「で、もうひとり…」

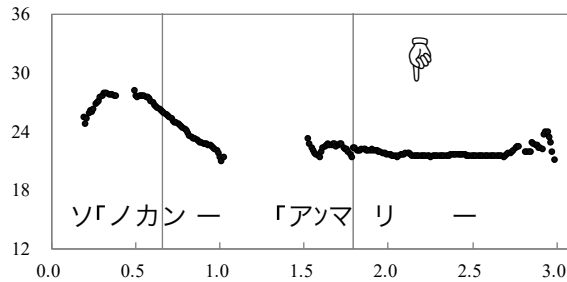


図6 長い無音調の「その間、あんまり…」

演説)

〈補足〉1例目の「もうひとり」の「リ」は図5で見ると大きな下降の形をとっているが、これは「ト」のあとにあるアクセントの下げを受けつぐ形で下降しているものであり、イントネーションとしては長い無音調である。2例目は「その間（かん）」では、アクセントとしての下げが「カ」のあとにあるので、「ン」も下がりながら伸びている。「アソマリ」では言いよんで最後が1秒以上長く平らに伸びているが、これは「あんまり」のアクセントが平板型のためである。実は、アクセントが平板型の場合は、無音調と平坦調の区別はむずかしい。ここでは一律に無音調としている。4例目は昭和初期の演説での使用例。

#### 4.2 強調型上昇調・平坦調の間投助詞的イントネーション<sup>7)</sup>

間投助詞がない文節の最後に強調型上昇調や平坦調を付けることは、話しことばにもあるが、多いのは下の3、4例目のように文を読む場合である。講演や講義では、4例目のように少なくとも昭和初期からあった。平坦調については、上村幸雄氏（1989）は「ひきのぼし音調」（筆者の平坦調の長いものに相当）が「高年の世代におおいとおもわれる」としており、少なくとも昭和中期にはあったことを思わせる。

複雑な内容の文章を読むときに、適切などころにこれを使うなら、意味の切れ目がわかりやすくなるという利点はある。特に問題視されている言い方ではないが、熟練したプロの話し手や読み手はほとんど使わない（郡 2014）。それは、中立的な情報伝達に必要ないものにかかわらず、耳に付きやすい言い方だからであろう。

強調型上昇調を付けたあとは、いったん低くしてから次を始めるのがふつうである。

- 例 1. || ナ「ガヤー ナガヤデー || コ「ドモワ コドモ↑ノ / オー「pミ「ブンデテ「pダ「スケシテ ↑ fネー || （長屋は長屋で、子供は子供の身分で手助けしてね：⑧1911m）
2. || マ「ダ || / || ライシューカラ「ダケ→ドー || / || ビ「ミョーナ カンジ || スル「ノヨネ || （〈番組が始まるのは〉まだ来週からだけど、〈期待できるかどうか〉微妙な感じするのよね：平

7) 筆者は、高さの変化のしかたの共通性をもとに、文末のものも文中の文節末のものも強調型上昇調とするが、川上氏（1963）は、文末の方は「第四種の上昇調」とし、文中の文節末の方は音の強まりはないとして「仮に第六種の上昇調と呼んでもよい」としている。川上氏の説明では文末の第四種には音の強まりがあるというが、実際には必須のものではないことは、郡（2015b）で示した。

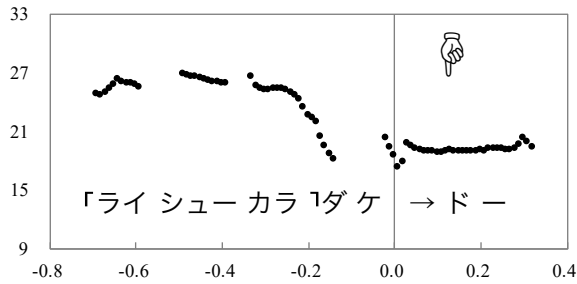


図7 平坦調の「来週からだけど…」

平坦調の例, ⑨1972f1) 【図7】

3. || オ「ジ」ーサンワ || ヤ「マ」エ || シ「バカ」リ↑ニ || / || オ「バ」ーサンワ || カ「ワ」エ  
|| 「セン」タクニ↑イ「p」キマ「シ」タ || (〈じょうずではない読みかせの例〉お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました)
4. || 「ア」ル || ヒ「ト」ツ↑pノ/↑ト || / || カ「ル」ク サ「ス」 || コ「ト」バ↑ニ || / || 「a」n /  
↑ト || / || 「a」ノ↑ト↑ガ || / || 「ア」ッ↑テ || (〈語学講座で「あるひとつの」と軽く指すことばにanとaとがあって…: 岡倉由三郎氏 [1868m] による1925年のラジオの英語講座, [http://cgi2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das\\_id=D0009060003\\_00000](http://cgi2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009060003_00000))

#### 4.2.1 列挙の用法

列挙するときには何か特別なイントネーションを付けないといけないということはない。付けるとすれば、今では上昇下降調が多いようだが、強調型上昇調のこともある。

【例】 || 「ト」マ↑ト || / || 「ニ」ン↑ジ「ン」 || / || 「セ」ロ↑リ || … (〈料理に必要な食材を指折りながら確認する〉)

#### 4.2.2 フォーカスと強調型上昇調

聞き手に伝えたいという気持ちをもっとも強い語句には、フォーカスがあると言う。間投助詞的イントネーションとしての強調型上昇調の働きのひとつは、自分の話をしっかり聞いてほしい気持ちをあらわすことなので、かならず使われているわけではないが、強調型上昇調がフォーカスがある文節の最後に付くことに不思議はない。下は会話での例だが、プロの読み手は別として、一般の人に文を読んでもらうときにはよく出てくる。

- 【例】 1. || 「p」デ「モ」ス「ゴ」イデス「p」ネ || 「キ」ュ「ー」ジ「ュー」 || 「イ」ッサイデ || 「f」バ「タ」フライ↑オ  
「レ」p「ン」シ「ュー」シテラ「ッ」シャル || (でも、すごいですね、91歳でバタフライを練習してらっしゃる: ①1933f)
2. || 「f」ナイフ「フ」ノー || カ「f」タ「ホー」ダ↑ケ「ド」p「ク」ガヌッ「p」テ「ア」ッタ || (ナイフの片方だけ毒が塗ってあった: ⑩1987f)

#### 4.2.3 文節内の単語末(助詞の前)での強調型上昇調

文節の中の単語の最後、つまり助詞(1拍)の前に強調型上昇調を付け、そのあとすぐ下げ

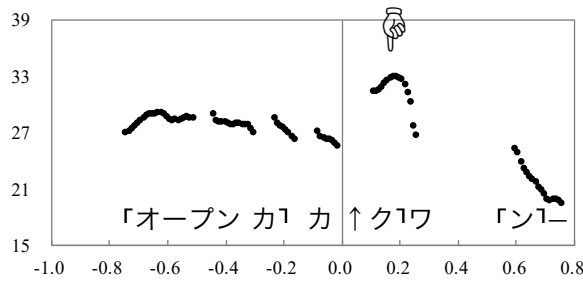


図8 文節内の名詞の最後が高い「オープン価格は」

る言い方がある。大石初太郎氏（1959）が言う「あと高型プロミネンス」の一種である。前川喜久雄氏（2011）はこれをPNLP (Penultimate Non-Lexical Prominence) と呼ぶ。すべての例が説明できるわけではないかもしれないが、これは、フォーカスがある語句が何なのかをはっきりさせる方法のひとつとして説明できそうだと筆者は考えている。

例 1. 「「オープンカ↑カ↑fク↑ワ || / || 「pン↑ー || / || ア/チ「ガ↑ウ || / || 「fオープンカ↑カ↑「ワ↑ー || / || 「メーカーガ↓ー || / || ソノウ「ルオミセ↑「ニー || マ「カ↑セタノ↑「ガ↑ー / 「p オープンカカ↑ク || (〈オープン価格と希望小売価格の違いについて、本を見ながら希望小売価格の説明をしたあとで) オープン価格は、うん、あ違う、オープン価格は、メーカーが、その、売るお店に任せたのがオープン価格：⑩1987f) 【図8】

2. 「「pン↑ー ア「タシモアノ || シ「fカオ↑ト↑pコ↑ワス「pキ↑ダッタ || (〈「鹿男」を演じている俳優について) うん、私もあの鹿男は好きだった：⑨1972f2)

3. 「「サンダイメ↓ー || 「ジェーソールブラ↑ザー↑ズ↑ノ ミ「pナ↑サン「デ↑ス || (〈出演者の紹介) 『三代目 J Soul Brothers』のみなさんです：『紅白歌合戦』2016年、相葉雅紀氏 [1982m])

4. || イ「ズレ「ワレワレノ || / || 「セ↑ンゾ↑「ワ↑ー || / || 「ソ↑ノ || ゴ「ンスケガ↑ミ↑カ || / || オ「サンドンガミデ || 「ア↑ッタ「pロ↑ート「pオ↑モ↑ー↑ガ || (いずれ我々の先祖は、その権助神がおさんどん神であったと思うが：高田早苗 [1860m] 氏の1929年の演説)

5. 「「pト↑キーノ / ハッ「シャ イタシマ↑ス↑ト↑ー || / || 「ナ↑ゴ↑「ヤ↑ト↑ー || / || 「キョ↑ー↑pト↑ニ / ト「pマリマ↑ス || (〈東京駅の構内放送, 1970年代前半か) 東京を発車いたしますと、名古屋と京都に止まります：『東京の音一音の風土記一』東芝TW-7010)

〈補足〉1例目では「希望小売価格」と対比された「オープン価格」の例で、「オープン価格」にフォーカスがある。2例目の「鹿男」もフォーカスがある例である。3例目の「J Soul Brothers」はテレビ番組の司会者の発言だが、同じ人が2曲前の出演者の紹介で「『SEKAI NO OWARI』のみなさんです」を「「セ↑カイノ || オ「ワリ↑ノ↑ミ「pナ↑サン「デ↑ス」と言っている。つまり、こちらには文節の最後に強調型上昇調を付けている。

4例目にあげたように、演説にはこの言い方は少なくとも昭和初期からあった。この演説では6分のうちに文節末での強調型上昇調26例、上昇下降調と急下降調31例、疑問型上昇調1例、



長い無音調 1 例とともに、文節内での強調型上昇調の例が 26 例も出てくる。

講演調の話し方では現在も結構よく使われているようだが<sup>8)</sup>、本稿の会話資料①～⑩で気がついたのはわずかだった。日常的に聞くのは、5 例目のような到着駅案内のアナウンスである。

### 4.3 上昇下降調・急下降調の間投助詞的イントネーション

#### 4.3.1 多く見られる用法と「尻上がりイントネーション」

1970 年代後半から 80 年代にかけて若者ことばとして喧伝された話し方に、「尻上がり」とか「語尾上げ」と呼ばれるものがあつた。間投助詞がない文節の最後に上昇下降調や急下降調を多用する話し方である。この話し方に対して、「幼い」とか「甘え」「軽薄」といった否定的な印象を持ち、嫌う人が少なくなかつた（井上史雄 1994）。

この 1970-80 年代に問題視されたような「尻上がり」よりも上昇のしかたが小さい可能性があるが<sup>9)</sup>、現代の会話では、間投助詞がない文節に大きくない上昇下降調（アクセントの下がり目がある文節で）か急下降調（それ以外の文節で）がたくさん使われている。個人差もあるが、特に 1970 年あたり以降に生まれた世代では、日常的な言い方になっている。

- 例 1. || デア「ラ」ガキ「p ユ」イガ || 「デ」テ「p テー」 || / || ア「ラ」ガキ「p ユ」イ「ワー」 || / || 「ナ」ンカ / コー || / || 「カ」コ「p ニー」 || / || 「ア」ツタ デ「p キ」ゴト「p デー」 || / || 「セーシンテキナ ショ」ツクオ「p ウ」ケ「p テー」 || / || シ「ツゴショーニ ナ」ツチャッテル オ「p ナ」ノ「コノ ヤ」ク「ナ」ノ || (で、〈そのテレビドラマには〉新垣結衣が出て、新垣結衣はなんかこう過去にあつたできごとで精神的なショックを受けて失語症になっちゃってる女の子の役なの：⑨1972f2)
2. || ソ「p レデー」 / ソ「コニ」 || 「ラジカセ オイテ」 ↓ || / || ア「p ノーキョ」クオ || ツ「ク」ッテタンデスヨ || (それで、そこにラジカセ置いて、曲を作ってたんですよ：③1951m)
3. || コ「ノ」 || / || チョ「ーシヤ」 || / || ヨ「クヨーヤ」「ハ」ヤサワ || / || ハ「ナシノ」 || イ「ロイロナ」バ「p ーイニ」ヨッテ ↓ || / || サ「マ」ザマ ↑ ニ || 「カ」ワルモノ ↑ デ「ゴ」p ザイマ「ス」p ガー || (この調子や抑揚や速さは話のいろいろな場合によってさまざまに変わるものでございますが：神保格氏 [1883m] の 1929 年の発音解説レコードから)

こうした話し方を日常的に使う現代の若年層を調査すると、間投助詞での上昇下降調と同じく、自分の話をよく聞いてほしいと思っているように感じ、また、考えながら話しているように感じるようである（郡 2016）。しかし、1980 年代以降生まれの世代でも、1 オクターブ以上あるような大きな上昇が付いたものと嫌う人が増える（郡 2017）<sup>10)</sup>。

8) 前川喜久雄氏 (2011)、谷口未希氏 (2008)。前川氏は、学会発表とスピーチの分析から、PNLP は発話の頂点表示と緩やかな境界表示の機能を有しているとし、数秒から 10 数秒におよぶ談話単位のみを提示し、あるいはその終了が間近であることを予告するために、必要に応じて PNL P を生成している可能性が高いと言う。

9) 佐々木香織氏 (2004, p.63) も、「現在は以前ほど極端な上昇下降を伴ったパターンは聞かれなくなってきた」と言う。

10) 郡 (2017) で報告した「森田さんが京都で田辺くんに…」を使った聴取実験の結果では、上昇下降調だけでなく強調

ただ、アナウンサーなら世代を問わず、ニュースはもちろん、それ以外の一般の番組においても、この上昇下降調を使うことを避けている。公の場面で使うべき言い方ではないと考えられているのだろう。単なる情報伝達には必要がないものなので、当然とも言える。

#### 4.3.2 「尻上がりイントネーション」の成立経緯について

「尻上がり」の成立の経緯については多くの意見があり、それを井上史雄氏（1994, 1998）と佐々木香織氏（2004）がまとめている。この言い方と関連づけて語られることが多いのが、1960年代の「ネサヨ運動」の結果として間投助詞が使われなくなり、イントネーションだけが残ったという趣旨のことで、1960年代末から70年代にかけての学生運動の「アジ演説」のイントネーションの影響である。

しかし、こうした言い方は、講演や演説では遅くとも昭和のはじめには使われていた<sup>11)</sup>。そしてそれが私的会話やテレビなどでの非私的な会話での使用へと徐々に使用場面を広げ、それが1970年代になって「尻上がり」の言い方として広く認識され始めたのではないかという推測を郡（2016）で述べた<sup>12)</sup>。事実、1967年の漫才だが、内海桂子氏[1922f]の発言に明らかな上昇下降調と急下降調が出てくる<sup>13)</sup>。筆者は、アジ演説は無関係だと思う。一方、ネサヨ運動は促進要因だったかもしれないとしても、それが原因で「尻上がり」が発生したものではないと考える。次にこれについて補足する。

##### 4.3.2.1 「ネサヨ運動」について

1960年代前半に盛んに行われた小学校でのネサヨ運動は、間投助詞（ないしは終助詞）としての「ね」「さ」「よ」の使用禁止運動と一般には理解されているが、もとは鎌倉市の腰越小学校から始まったものである。発案者の小島寅雄氏は鎌倉出身で、当時その校長だったが、この地は漁師町で、ことばに「乱暴なひびきがあって、このことばは聞く人にたえられない印象を与える」という意識があったようだ（小島寅雄 1970, p.114）。橋本典尚氏（2002）が報告する小島氏の話では、運動のきっかけは「腰越町は、元々漁師町でね。－ね－え。－でえ－さ－あ。と語尾を伸ばしたり、上げたりするんですよ、それが、耳障りに間合いが取れないことが多くあって、想いがきっかけでね。」ということらしい。すると、発案者が気になったのは、実は自身も

---

型上昇調も、上昇が大きいとこの世代でも嫌われる度合いが高くなる。強調型上昇調の場合は6半音、上昇下降調の場合は9半音程度までなら嫌われる度合いは低い。それでもこのふたつのイントネーションとしてはかなり大きな上昇である。

11) ただ、川上葵氏（1956）は「専ら講演の際などに用いられるが、東京人の耳には幾分異様にひびく音調であり、これを決して用いない東京人も多い」と言う。

12) 1950年代かそれ以前から徐々に広がったという推測は佐々木氏（2004, p.73）も述べている。

13) 「どっちもどっち」『極めつけ!! 桂子・好江』コロムビア COCJ-33288, 2005年。上昇下降調の例は [「ホ<sup>1</sup>ーポーノ || 「オーゼ<sup>1</sup>ーノ || 「カ<sup>1</sup>ミサマ<sup>1</sup>フ<sup>1</sup>ガ<sup>1</sup>ー || / || イ<sup>1</sup>ワドノマ<sup>1</sup>エ<sup>1</sup>フ<sup>1</sup>デー || / || オ<sup>1</sup>カ<sup>1</sup>クラオ || オ<sup>1</sup>ドック<sup>1</sup>リ || 「ナ<sup>1</sup>ンカシ<sup>1</sup>「<sup>1</sup>プ<sup>1</sup>デー || / || ゴ<sup>1</sup>フキゲンオト<sup>1</sup>ツ<sup>1</sup>デー || / || 「ア<sup>1</sup>マテラス || 「オーミ<sup>1</sup>カ<sup>1</sup>↑<sup>1</sup>フ<sup>1</sup>ミ<sup>1</sup>オ || イ<sup>1</sup>ワヤ<sup>1</sup>↑<sup>1</sup>カ<sup>1</sup>ラ オ<sup>1</sup>ダ<sup>1</sup>シシタ<sup>1</sup>ノヨ || ] (方々の大勢の神様が岩戸の前でお神楽を踊ったりなんかしてご機嫌をとって天照大神を岩屋からお出したのよ)。下降調の例は [「ア<sup>1</sup>プ<sup>1</sup>ノー<sup>1</sup>ワ<sup>1</sup>フ<sup>1</sup>タクシガ<sup>1</sup>↓<sup>1</sup>ーゴ<sup>1</sup>「<sup>1</sup>プ<sup>1</sup>ゾンジ<sup>1</sup>↑<sup>1</sup>プ<sup>1</sup>ノ / 「<sup>1</sup>プ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>ツミ<sup>1</sup>「<sup>1</sup>プ<sup>1</sup>ケ<sup>1</sup>ーコデ<sup>1</sup>ゴザイ<sup>1</sup>↑<sup>1</sup>プ<sup>1</sup>マ<sup>1</sup>ス] (あの、私がご存じの内海桂子でございます)。このほか、注6で触れた1947年の「街頭録音『ガード下の娘たち』」での藤倉アナウンサー [1914m] の「世間が」の「が」にも、上昇下降がある。ただし、下降が2半音と小さく、長い強調型上昇調にも聞こえなくはない。

使っている間投助詞自体ではなく、それ以前から存在していたそのイントネーションだったということになる。

このイントネーションの具体的な音形は橋本氏の記述からは確定できないが、「ねえ」「さあ」という3要素からなる表記を見ると平坦な音形や単純な上昇音形とは考えにくい。むしろ、上昇下降調そのものか、上昇下降調のあとに疑問型上昇調または強調型上昇調を続ける複合音調ではないかと筆者には思われる。つまり、少なくとも上昇下降調、したがって「尻上がり」的な高さの動きを含んでいたのではないかと考える。そうだとすると、従来説とは逆に、「尻上がり」が先で、「ネサヨ運動」は後ということになる。

#### 4.3.2.2 アジ演説の口調について

アジ演説の口調について、井上氏（1998）は、尻上がりの口調とでは「時期は一致するが、使用者と使用場面、使用効果があまにも食い違っている」と指摘している。さらに、井上氏（1994）は「音声的にも相違するようである」としている。

当時のアジ演説については、その音声の実態を詳しく説明した文献がないようなので、筆者による簡単な調査結果をここに書き留めておく。下に示すのは、1947年生まれ、広島県出身で、日大全共闘議長であった秋田明大氏による1968年5月の演説の一部である。

【例】 ㊦ ガ「クセーシヨクン ㊦ / ㊦ ア「ノ↓ー ㊦ / ㊦ ニ「ホンダ「イガク「↑pノー ㊦ / ㊦ フ「ハイシタ↓ー ㊦ / ㊦ 「ソシテ↓ー ㊦ / ㊦ キヨ「ダ「イ「↑pナー ㊦ / ㊦ キ「コーニ「タ「イシ「↑pテー ㊦ / ㊦ ワ「レワレガ↓ー ㊦ / ㊦ 「コノ↓ー ㊦ / ㊦ 「タタカイオ↓ー ㊦ / ㊦ ナ「ニユ「↑pエー ㊦ / ㊦ オ「コシテ「イ「pル「カ ㊦ (学生諸君、あの、日本大学の腐敗した、そして巨大な機構に対して、我々がこの戦いを何故におこしているか：『田原総一郎の遺言 全共闘／学生右翼』ポニーキャニオンPCBE-12007, DVD, 2012年) 【図9】

ここまでで12秒弱、ポーズを抜くと8秒強の長さである。基本的に文節ごとのぶつ切りであることが上の書き起こしからすぐわかるが、そのことと、ポーズ前の下降部以外は非常に平板的で、その部分の高さが約400Hz (図で36の目盛) と、男性として地声で出せる最高音域を使い、遠くに向かって叫ぶような調子であることが特徴としてあげられる。「日本大学」「対して」のように起伏式の語でもアクセントとしての下降量を小さく言っており、全体として文節末以外は平板的になっている。文節末の音調は急下降調が主で、それに、上昇下降調だが上昇量が小

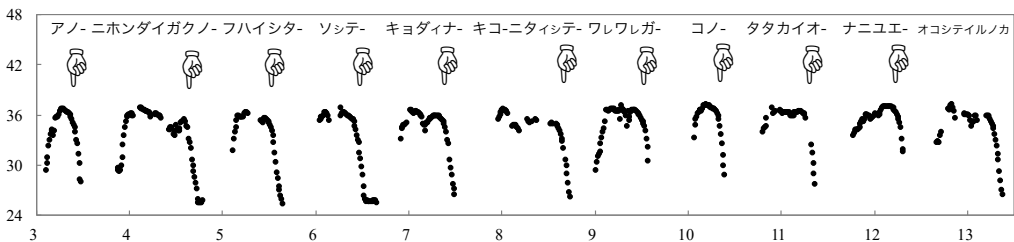


図9 アジ演説の例

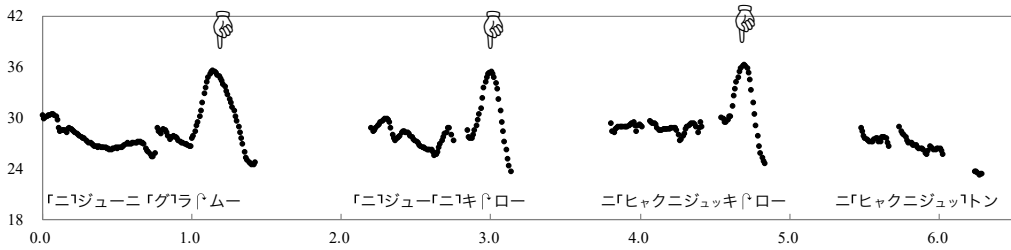


図10 列挙の上昇下降調「22グラム、22キロ、220キロ、220トン」

さいものが混じっている。しかし、同じ音源に収録されている信州大学と立命館大学の演説は、基本的に文節ごとのぶつ切りであることは同じだが、イントネーションは平坦調または長い無音調のみである。他の音源には、アクセントを無核化した上でぶつ切りしただけで、短い無音調の例も聞かれる<sup>14)</sup>。つまり、「アジ演説」は文節で切って叫ぶように言うものであって、末尾のイントネーションはさまざまだったようだ。したがって、尻上がりイントネーションとの直接的な関係は考えにくい。

#### 4.3.3 列挙の用法

このイントネーションには、複数の語を列挙する場合や、「AはBだけど、CとDはEだし、FがGなので…」というような文（節）が連続する場合の使い方があ

**例** 1. || リ「サ<sup>1</sup>イク<sup>1</sup>ル<sup>1</sup>ー || / || リ「ユ<sup>1</sup>ー「p<sup>1</sup>スー || / || 「ナ<sup>1</sup>ンダロー「p<sup>1</sup>ア<sup>1</sup>ト || (〈環境配慮における3Rとは何かというクイズを出されて、その答え)リサイクル、リユース、なんだろう、あと：①1986f)

2. || 「ニ<sup>1</sup>ジュ<sup>1</sup>ー || ニ「グ<sup>1</sup>ラ「f<sup>1</sup>ムー || / || 「ニ<sup>1</sup>ジュ<sup>1</sup>ー || 「ニ<sup>1</sup>キ「f<sup>1</sup>ロー || / || ニ「ヒヤクニジュ<sup>1</sup>ッキ「f<sup>1</sup>ロー || / || ニ「ヒヤクニジュ<sup>1</sup>ットン || (〈クイズの解答の選択肢を読み上げる)22グラム、22キロ、220キロ、220トン：①1986f) **【図10】**

〈補足〉どちらの例も同じ話し手だが、2例目では、図10からわかるように、上げ下げが非常に際だつ言い方になっている。

#### 4.4 疑問型上昇調の間投助詞的イントネーションと「半疑問イントネーション」

文節末や文節内部には疑問型上昇調も使われる。そのことで答えを求める場合もあるが、答えを求めない使い方もある。答えを求めない使い方は演説・講演や文を読む場合には以前からあったが、会話での使用は新しい言い方と認識されている。本稿では、井上史雄氏(1998)、陣内正敬氏(1998)の呼び方にしたいが、これを「半疑問イントネーション」と呼ぶ。

すでに多くの考察がなされているが、ここでは、使い方として会話の協働性を高める方策だと理解できるものと、他の間投助詞的イントネーションと共通の使い方だと理解できるものが

14) 「日大闘争の記録『日大闘争』」 <https://www.youtube.com/watch?v=Y2w7utTezy4>

あること、そしてこれは以前からあった言い方の適用範囲を広げたものであり、それは間投助詞の間投助詞的イントネーションへの移行という大きな流れの中でとらえられること、適用範囲拡張を促したのはコミュニケーション様式の変化だと理解できることを述べる。

#### 4.4.1 答えを求める疑問型上昇調

間投助詞のない文節の最後に疑問型上昇調を付けることで、発言の中に質問を埋め込む形で、自分の表現が適切かどうかの確認を聞き手に求めることがある。この言い方は「半疑問イントネーション」が意識される以前から存在する。

【例】 || 「タクシーダイ || モ「タ」ナイデ || ア「ナタノウチ || イ「ラ」シ「f」テ || / || オ「ジ」/「タ」クシーノ || オ「ジ」サンガ「f」ネー || / || コ「マ」ルッテ「ユ」ーン「p」デ || / || 「リンゴー / オ「イ」ワ「f」ケ || / [相手:「ン」ー] || ウ「タ」ッタ「ッ」テ / ユー || オ「ハ」ナシ || シ「テ」クダサ「ッ」タケドモ || (〈美空ひばり氏が〉タクシー代持たないであなたのおうちにいらして, [おじ…] タクシーのおじさんがね, 困るって言うんで, 『リンゴ追分』歌ったっていうお話をしてくださったけども:

②1933f, 1989収録)

#### 4.4.2 答えを求めない疑問型上昇調と「半疑問イントネーション」

ところが、文の中で、文節末でも文節内の単語末でも、答えを求める必要があるとは思えないところに疑問型上昇調を付ける話し方がある。使用頻度は高くないが、例を6つ示す。

- 【例】 1. || エ「ド」ノ「マ」チ「ガ」p「カ」ンセースル「マ」デニ「ワ」ー || / || オ「ヨ」ソ || 「ヒ」ヤ「フ」ク「ネ」ン「ワ」カ「p」カッタ / 「f」ト / 「イ」p「ワ」レテイ「マ」ス || (〈講演の例〉江戸の町が完成するまでにはおよそ百年はかかったと言われてます: 2016年10月25日, NHKカルチャーラジオ 歴史再発見「芸者が支えた江戸の芸」(4)での安原眞琴氏 [1967f])
2. || 「タ」シカニ || 「f」チョ「ッ」ト「コー」 || / || ナ「f」ガ「ク」ナッ「p」タ「カ」オ「ガ」f「ー」 || / || デ「f」パーツガ || 「f」オーキ「ク」ナッタノカ「p」ナー || (〈こどもが大人になって〉たしかに, ちょっと, こう長くなった, 顔が, で, パーツが大きくなったのかな: ⑨1972f2:「長く」開始に0.4秒遅れて相手が「うん, 長くなったよね, 顔の, うん」) 【図11】
3. || ク「ル」マノ「サ」キツ「チ」ョニ「ツ」イテタ || 「エ」ンブレ「ム」ー / [相手:「ン」ー「ン」ー] ガー「ン」ナシカ「ア」ノー || / || オ「ト」ーサンカナ || オ「カ」ーサンカ「f」ナ || / || シ「ヌ」ト「キ」「p」ニー || (〈マンガのストーリーについて, 聞き手が知らない部分の説明) 車の先っちょについてたエンブレムが, なんかあの, お父さんかな, お母さんかな, 死ぬときに…: 相手は「エンブレム」のすぐあとに「うんうん」とあいづちを打っている, ⑩1986m)
4. || コ「コ」ニ「キ」テ「ヤ」ッパ || ジ「ブ」ンオ「ミ」ツメナオ「ス」ルー / コ「ト」ガ「p」オ「ク」ナッ「f」テー || / || 「セー」チョ「f」ー / シ「タ」ノカ「f」ナ「ト」オ「p」モイ「マ」ス || (ここに来て, やっぱ自分を見つめ直すことが多くなって, 成長したのかなと思います: 2015年10月19日, 日本テレビ系『島が学校~ある女子高校生の離島留学~』での東京育ちの女子高校生の語り)
5. || 「ア」ト || ヤッ「パ」リ || / || アノ「ソ」f「ボ」クナ「カン」ジ「p」ー / 「f」ガー「ア」ノー || / || ト

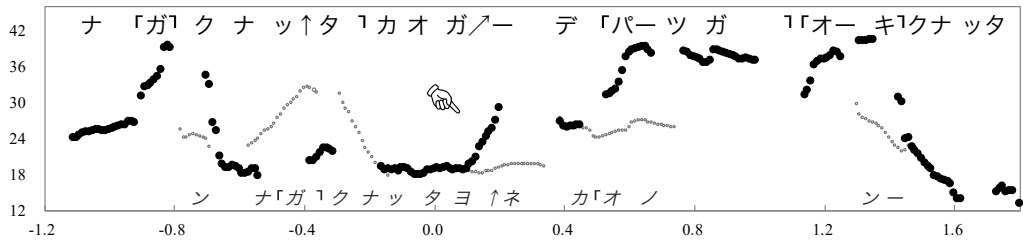


図11 半疑問イントネーションの「顔が」(薄い色の線と斜体字は話し相手の発言)

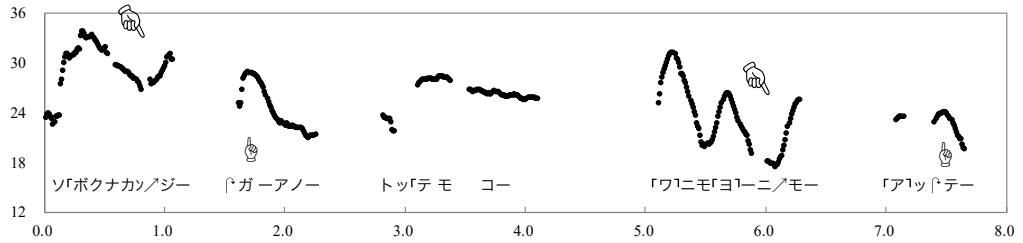


図12 半疑問イントネーションを使った「素朴な感じがとつても和にも洋にも合って…」

ッ「テモ コー || / || 「fワ」ニモ || 「ヨ」ーニモノー || / || 「ア」ッ「テ」アノー || オ「イ  
 テイテ」ー コー || / || ス「ゴ」クノー / ナ「ジ」ムノー / カ「p」ジガシ「p」ター || (あと、  
 やっぱり、あの、素朴な感じが、あの、とつても、こう、和にも洋にも合って、あの、置いていて、こ  
 う、すごくなじむ感じがして：2006年6月26日、NHK教育TV『おしゃれ工房』での中年層と思われ  
 る女性の語り)【図12(一部)】

6. || デヘ「ヤ」ムコーガワ「ニ」ワノー || / || マ「リ」ン「f」バー / 「ト」カ || / || 「ティ」ン「p」ア  
 ニー / 「ト」↑カ || / || 「オー」ダ「イ」↑fコー / 「ト」ノ「f」カ || / || アレ「ナ」ンダロー || (ラ  
 ジオ番組内で、広い放送スタジオの中に置いてある楽器の説明の途中)で、部屋の向こうにはマリンパ  
 とか、ティンパとか、大太鼓とか…あれ何だろう?：1995年3月21日、NHK FM『ミュージック・  
 スクエア とつておきチューズデイ』での番組進行役、谷村有美氏 [1967f] の発言)

1例目と2例目は「完成するまでには」「顔が」という文節の最後に付いている。しかし、3  
 例目の「エンブレム/が」、5例目の「感/じ/が」、6例目の「マリン/パ/とか」では、疑  
 問型上昇調が助詞の前、つまり単語末に付いている。4例目の「成/長/したのかな」では、サ  
 変動詞の語幹の末尾についている。つまり、3例目以下は文法的に文節より浅い切れ目に付い  
 ている。そして、3～5例目では、文節末の上昇下降調と併用されていて、これらの例ではイ  
 ントネーションの型による使い分けがあることがうかがえる。

こうした言い方がいつからあるかと言うと、1例目のように演説・講演や文を読む場合の文  
 節末の疑問型上昇調は遅くとも昭和初期からある。神保格氏の日本語音声の解説レコード(1929)  
 の説明音声でも「ローマ字でたとえばサをsとaと2つの字を並べて書くのを見てもわかるとお

り」の「タトエバ」などで使っている<sup>15)</sup>。ラジオの『コドモの新聞』の村岡花子氏の話し方(NHK1977によれば1932-41年担当)は、文節末で強調型上昇調とともに疑問型上昇調を使っている<sup>16)</sup>。ただ、疑問型上昇調でもあまり長く伸ばす例は少ない。

問題は2例目以下である。会話において、このように文節末あるいは文節内部で特に答えを求めない疑問型上昇調を使うことは、1990年代前半の若者からとされ、「半疑問イントネーション」のほか「半疑問形」「半クエスチョン」などと呼ばれる<sup>17)</sup>。

名称だけでなく指示範囲にも違いはあるが<sup>18)</sup>、耳につく新しい言い方ということでこの疑問型上昇調に対する印象や使用意義の解釈を記した書き物は多い。実証的な研究としては、野呂幾久子氏(1998, 2001)、木下恭子氏(1999)、斎藤理香氏(2016)のものがある。

使い手は女性の方が多いようだ(野呂 2001, 斎藤 2016)。斎藤氏は親しいどうしの会話の方が多いとする。ただ、同氏も指摘するように、使う人と使わない人で個人差がある。何らかの意味があってこの言い方が使われていて、そこには積極的な受け入れを促す理由があるはずだが、現実の広がりは大きくない<sup>19)</sup>。むしろ、これを嫌う人が当初からいたし<sup>20)</sup>、1990年代の生まれの世代でも嫌う人は少なくないようだ<sup>21)</sup>。文節末の強調型上昇調・急下降調の話しことばでの多用は、「尻上がり」などと呼ばれて新しい話し方として認識されたあと、問題視されながらも日常的話し方の中に定着していったのとは様子が異なる。

15) 日本語教育学会(編)『戦前戦中の日本語教育教材レコード復刻版』凡人社 2003年所収。

16) 文化庁(1980, p.20)に記された林大氏の発言によれば、これが当時の子供にも影響を与えた。なお、郡(2016)の注5では強調型上昇調を多用しているとしたが、正確に言うと、短いが明らかな疑問型上昇調、短いが明らかな強調型上昇調、そしてどちらも決めがたい上昇調が混在している。ここに訂正する。逆に、川上肇氏(1963)には『コドモの新聞』での村岡氏の上昇は、質問の上昇(筆者の疑問型上昇調)と同じものであるかのように書かれているが、それも正確ではない。

現在、『コドモの新聞』の1932年の放送例を『NHKアーカイブス』で聞くことができる  
([http://cgi2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das\\_id=D0009060026\\_00000](http://cgi2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009060026_00000))。

17) 初期の現象指摘である井原圭子氏(1994)では「半クエスチョン」と名づけられている。「半疑問形」という呼び方は、テレビ番組の『タモリ倶楽部』(テレビ朝日, 1995年6月16日放送分: <http://wdesk.net/image/tamori-club1995-06.html>)などを通じて広まったようだ。

18) 文節内部の助詞前での疑問型上昇調の例だけをあげている書き物もあれば、「みたいな」の前での疑問型上昇調は除いているものもある。また、文末の述語での使い方を指している例もある。たとえば、「『誰から?』/『んー、ココ編集部?』/なぜ半疑問形で答えるのだ。訊いているのはこっちだ。」(榎花月 2010『最後から二番めの恋』学習研究社)、「『前田さんって、どういう基準で食器とか選びます?』/『機能性……?』/自分のことなのになぜか半疑問形で答えた希一は、顎に手をあててしばらく考えてから、『あとデザインと値段……かな?』と、これまた半疑問形で付け加える。」(冬野まゆ 2016『小鳩君ドット迷惑 押しかけ同居人は人気俳優!?』竹書房)。

このほか、「半疑問」が「とびはね音調」を指していると思われる例もある。たとえば、「嫌いな相手にどう思われてもよくない?」/投げやりな半疑問形で返し…(加藤実秋 2012『テディ・ゴー! アー・ユー・テディ? 2』PHP研究所)のようなものである。

19) 斎藤氏(2016)が報告する2011年から14年録音の1058分の会話資料では158例だったと言う。

20) 斎藤氏(2016)は、活字になった否定的意見をいくつか紹介している。野呂氏(2001)は、聴取実験によるイメージ調査の結果にもとづいて、「上昇調が用いられたことについて聞き手は、『話し手は自分の反応を伺い、尊重しながら、自分との協関係のもとに会話を進めようとしている』と解釈することによって、『丁寧さ』『優しさ』を感じ、全体として好感を持って受け止めていると考えられる」、「反面、話し手が、『〜で正しいでしょうか?』『わかりますか?』『〜だと思いませんか?』などの必要な言語形式を省略し、その意味を音調だけで表現している点、しかし一方、聞き手には言語的・非言語的の反応を要求しているという点が、『ふてぶてしい』『押しつけがましい』という否定的な印象につながったのではないだろうか。」としている。

21) 郡(2017)で報告した「森田さんが京都で田辺くんに…」という文の断片(述語なし)を使った聴取実験の結果では、疑問型上昇調は6半音という、このイントネーションとしてさほど大きくない上昇でも嫌われる度合いが高い。

#### 4.4.2.1 半疑問イントネーションの機能

多くの用例を見てゆくと、半疑問イントネーションの働きにはさまざまなものがあるように思える。野呂氏（1998）はそれを5つに分けた上で、まとめて「基本的には『聞き手の反応を伺いながら、聞き手との協調関係のもとに談話を進めようとする話し手の姿勢を示す』ことにある」と言う<sup>22)</sup>。確かに、反応を待つのは疑問型上昇調のひとつの使いかたでもあり、野呂氏の考えは実際の用例とも矛盾しない。また、男性の方が非協調志向が強く、女性の方が非協調志向が弱いということで、男性の使用が少なく、その分、相対的に女性の使用が多いことの説明もしやすい（3.1節で見た間投助詞の場合と同じ）。この考え方で行けば、上の例1, 4, 5, 6のように、聞き手が対話相手ではないときの使い方は、自分に協調性があることを見せる話し方ということになるだろうか。

ただ、そのような肯定的な働きがあるなら、もっと広く使われていてもよさように思えるが、そうではない。また、使い手の意図はそうだとしても、聞き手には質問かと思わせることになって、逆に円滑なコミュニケーションを阻害するリスクがあるのになぜ疑問型上昇調を使うのかという疑問も残る。

半疑問イントネーションの使い方については郡（1997, 2003）でも私見を述べたが、ここでは野呂氏などの研究も参考にしつつ、間投助詞的イントネーションという観点からあらためて考えてみたい。

野呂氏の考えとは少し異なるが、現在の半疑問イントネーションの使い方には、性質が異なる2系統のものがあると思う。ひとつは、(a) 野呂氏が言うような会話の協働性を高める方策だと理解できる使い方である。もうひとつは、(b) 他の間投助詞的イントネーションと共通の使い方である。これは、聞き手が対話相手ではない場面にもあらわれる使い方で、やさしい言い方であるとしても、協調性を示すのが目的ではないと思われるものである。

そして、(a) には、(a1) 表現として適切かどうか自信がないという気持ちがあるか、想像した不確実な内容であって、断定せず、判断を聞き手に委ねていると思われる場合と、(a2) 聞き手が理解するかどうかを探っていると思われる場合がある。

一方、(b) には、(b1) この先に話す内容や言い方を考えるのに手間取っている、あるいは自分の話をしっかり聞いてほしい気持ちがあるように思われる場合（長い無音調や強調型上昇調、上昇下降調の使い方と共通）、(b2) 疑問型上昇調を付けて聞き手の注目をひくことで、その語や文節が自分が特に主張したい箇所であること、つまりそこにフォーカスがあることをあらわすと

22) 野呂氏は、文末での類例も含めて、(1) 発話継続の確認（この後本文に示す筆者のb1）、(2) 不確かな情報の確認（筆者のa1）、(3) 聞き手の知識・理解の確認（筆者のa2）、(4) 同意・共感要求（筆者はb2と判断したい）、(5) 注目要求（筆者のb2）に分けている。木下氏は出現環境を、① 句の意味や、句の文の中への組み込まれ方に問題があるとき、② 相手の理解が十分でないことが予想され、それを補おうとする時、③ 自分の主張を理解させようとする時にまとめている。平地恩氏（2008）はTVドラマの例として「家族でもねーのにふざけんじゃねーよ。お嬢様のいい人づらしてボランティア活動のつもりかよ。金も持ってて(?)、体も健康で(?)、そんなあんたに何が解んだよ」をあげ、「相手の反応を見るためでなく、相手の注意を惹くためだけに用いられる」または「相手に反論を許さない強い言い方」と考えられるとしている。これは、筆者の分類ではb2かb3になると思う。



思われる場合（強調型上昇調の使い方と共通で、大石氏（1959）の言い方を借りると「あと高型プロミネンス」としての用法）、そして、(b3) 列挙の手段と思われるものがある（強調型上昇調、上昇下降調の使い方と共通）。

次に、以上のことを例に則して具体的に説明するが、実際の用例がどの使い方なのか判然としないことは少なくない。2例目の「顔が」では、(a1)の「表現として適切かどうか自信がない」という気持ちをこめて、断言せずにやわらげた言い方にして自分の想像を述べ、その妥当性の判断は聞き手に委ねるために疑問型上昇調を使っているように思える。3例目の「エンブレム」も同様に考えることはできるが、ここは直前にポーズや言いよどみがないことから、自分はその表現の正しさに自信があることがうかがえ、むしろこのやや専門的な用語を、(a2)の「聞き手が理解するかどうかを探る」ために言っているようにとれる。

4例目（「見つめ直す」「成長」と5例目（「(素朴な)感じ」「(和にも)洋にも」「なじむ」）のような、聞き手が対話相手ではない場面での使用は、(a1)の「表現として適切かどうか自信がない」かもしれないが（特に4例目の「成長」）、(b1)の「この先に話す内容や表現のしかたを考えるのに手間取っている」とか「自分の話をしっかり聞いてほしいという気持ちをあらわす」とも考えられる。(b1)ならば、上昇下降調や強調型上昇調の間投助詞的イントネーションの使い方と同じである。しかし、ここでは直後に上昇下降調も使われているので、重なることになる。むしろ、このうちの多くでは疑問型上昇調は当該の単語に(b2)「フォーカスがあること」を示すことに特化していると考えることができそうである<sup>23)</sup>。

6例目の「マリンバ」と「ティンパニ」は、(b3)の「列挙の手段」として次に同類が続くことを示すために使っているという解釈が自然に思えるが、(b2)「フォーカスがあること」も示しているかもしれない。列挙の手段に該当する例は陣内氏（1998）もあげている（「若いころ、誰に憧れてた?」「中島みゆきさん♪、山口百恵さん♪」：記号は原文のまま）。

疑問型上昇調が(a)のように会話をより協働的なものにする手段だとしても、また、(b)のように他の間投助詞的イントネーションと同じ働きをあらわす手段だとしても、使い手の意図としては、どちらも正確な相互理解をめざして使っていると考えられる。しかし、疑問型上昇調を使うことで聞き手には質問に聞こえるリスクがある。そのリスクがあるから広く使われていないのだろうと、筆者は現時点では考えている。また、疑問型上昇調を使うことで、自信がなく優柔不断な話し方に聞こえる可能性があり、いちいち反応を求めることで甘えた話し方に聞こえ、野呂氏（2001）の言い方を借りると「ふてぶてしい」「押しつけがましい」ように感じ、うとうとしがる人が出てくる。そうした否定的な面が気にならず、肯定的に見る人が半疑問イントネーションを使うのだろうと考えている。

23) 4例目の「見つめ直す」は、その次の「多くなって」のアクセントが弱められていること、5例目の「(素朴な)感じ」と「(和にも)洋にも」は「素朴な」「和にも」のアクセントが強められていること、また、5例目の「なじむ」は先行する「すごく」という修飾語があるにもかかわらずアクセントが弱められていないことは、それぞれ「見つめ直す」、「素朴な感じ」全体、「和にも洋にも」全体、そして「なじむ」に話し手がフォーカスを置いているためだと思われる。

#### 4.4.2.2 半疑問イントネーションの成立過程

なぜこの言い方が使われ出したかについて、井上氏（1998）は、英語から入ってきた可能性とフォリナートークの拡張の可能性について述べている。ここでは、これが日本語の話しことばの変化の中で必然的なものだったという私見を述べる。

#### 間投助詞的イントネーションとしての疑問型上昇調の日常会話への広がり

すでに見たように、演説や講演、文の読みといった非会話的な話し方では、文節末での間投助詞的イントネーションは、疑問型上昇調、強調型上昇調、上昇下降調（と急下降調）、長い無音調とも、遅くとも昭和初期には使われていた。強調型上昇調の変種である平坦調も、少なくとも昭和中期にはあったようだ。そして、文節内部の単語末でも、昭和初期にはすでに強調型上昇調が使われていた。

一方、日常的な会話においては、文節末と文節内での強調型上昇調と長い無音調は遅くとも昭和中期あたりまでにはあった<sup>24)</sup>。文節末での上昇下降調と急下降調は川上夔氏（1956）によれば日常的な会話では使われていなかった。しかし、すでに述べたように1967年の中年層には確実にあり、それ以前の昭和中期にもあった可能性がある<sup>25)</sup>。これが1970年代に急に目立ってきた。「尻上がりイントネーション」である。これにより間投助詞を使う必要性が小さくなった。

このような、間投助詞の間投助詞的イントネーションへの移行という流れの中で、残っていたイントネーション型である疑問型上昇調が、次の新しい間投助詞的イントネーションとして、文節末でも文節中でも使われるに至ったことには何ら驚くべき点はない。これは、上記の(a)の会話の協働性を高める使い方にもあてはまるが、(b)の、他の間投助詞的イントネーションと共通の使い方についても言えることである。

質問だと誤解されるリスクを考えなければ、疑問型上昇調を使用することで、断定的で一方的な「きつい」言い方でなく、「やさしい」言い方にすることができ、口調をやわらげるメリットがある。上昇調で口調をやわらげたり、列挙するのに使うことは英語にもあるので、井上氏（1998）の言うような帰国子女などの話し方が促進要因になった可能性はあるが、一定の広まりを見せたのは、日本語表現として受け入れる素地とメリットがあり、また次に述べるような需要があったからだろうと思う。

#### コミュニケーション様式の変化

郡（2003）でも示唆したが、1990年代には「お荷物のほう、お預かりします」「鈴木さんと話とかしてました」「とても良かったかな、みたいな…」のような「ほかす言い方」（文化庁 2000）

24) 強調型上昇調の文節末と文節内での使用については、川上夔（1957）、大石初太郎（1965）、田中章夫（1973）の各氏がそれぞれ触れている。特に、田中氏は「一般の会話でも」と書いている。文節末と文節内での長い無音調の使用例は注6で触れた1947年録音の街頭インタビューでの1928年生まれとされる女性と藤倉アナウンサー [1914m] の発言に聞ける。

25) 注13の後半の記述参照。また、1978年の録音だが、『よそではめったに聴けないはなし 下町浅草人情の街』（キングレコード KICH2210, 1978のTrack 1, 8）の会話的インタビューにおける女性 [1897] と男性 [1903] にも、また1980年の本稿の資料⑧での男性 [1911] と女性 [1907] にも、文節末に強調型上昇調・平坦調、上昇下降調・急下降調、長い無音調のいずれもが、多くはないが出てくる。

の多用が目された。こうした断定や対立を避けようとする表現の隆盛は、協働的な会話への志向のあらわれだと理解できる。また、やはり同時期に出てきた「とびはね調」も相手の反応をうかがいながらコミュニケーションをおこなう手段である<sup>26)</sup>。半疑問イントネーション、特に(a)の用法の登場は、これらと同じ文脈で理解できる現象である。

## 引用文献

- 井上史雄（1994）『『尻上がり』イントネーションの社会言語学』『現代語・方言の研究』（国語論究第4集）1-29, 明治書院。
- 井上史雄（1998）『社会方言学論考—新方言の基盤—』明治書院。
- 上村幸雄（1989）「日本語のイントネーション」『ことばの科学』3, 193-220.
- 宇野義方（1955）「イントネーションの調査」『談話語の実態』国立国語研究所, 15-51.
- NHK（1977）『放送の五十年—昭和とともに—』日本放送出版協会。
- 大石初太郎（1959）「プロミネンスについて」『ことばの研究』1, 87-102.
- 大石初太郎（1965）「疑問表現の文末音調」『音声の研究』11, 77-90.
- 川上葵（1956）「昇降調の三種」『音声学会会報』92, 7-8/25.
- 川上葵（1957）「東京語の卓立強調の音調」『国語研究』（国学院大学）6, 21-31.
- 川上葵（1963）「文末などの上昇調について」『国語研究』（国学院大学）16, 25-46.
- 木下恭子（1999）「非文末上昇イントネーションの現れる言語環境と心理的基盤」『言語処理学会第5回年次大会発表論文集』243-246.
- 郡史郎（1997）「日本語のイントネーション—型と機能」『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, 169-202.
- 郡史郎（2003）「イントネーション」上野善道編『朝倉日本語講座3 音声音韻』朝倉書店, 109-131.
- 郡史郎（2014）「物語の朗読におけるイントネーションとポーズ—『ごん狐』の6種の朗読における実態—」『言語文化研究』（大阪大学）40, 257-279.
- 郡史郎（2015a）「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』（大阪大学）41, 85-107.
- 郡史郎（2015b）「日本語の疑問型上昇調と強調型上昇調の音声的特徴について—聴取実験によ

26) 「とびはね調」（田中ゆかり 1993, 2010等）も疑問型上昇調の新しい使い方として平成期から使われるようになった言い方である。これは、「かわいくない?」「か「ワイク／ナイ」, 「無理じゃない?」「ム「リジャ／ナイ」のように、「ない」や「じゃない」が付く語のアクセントを平板にし、それに平板の「ない」「じゃない」を付け、さらに疑問型上昇調を付ける言い方である。筆者の現在の考えでは、これは自分の判断を相手の反応をうかがいながら非断定的に伝える言い方である（同意要求ではあるが、それよりも、自分の判断を伝えることに主眼があると見る）。筆者は、より協働性の高い会話の志向というコミュニケーション様式の変化にともなって使われるようになったのではないかと考えている。「半疑問」とともに平成期を特徴づける「平成イントネーション」と言えよう。

- る検討—」『大阪大学言語文化学』24, 33-46.
- 郡史郎 (2016) 「間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション—型の使い分けについて—」『言語文化研究』(大阪大学) 42, 61-84.
- 郡史郎 (2017) 「日本語イントネーションについてのいくつかの聴取実験」『言語文化研究』(大阪大学) 43, 249-272.
- 小島寅雄 (1970) 『子どもと生きて』創造社.
- 斎藤理香 (2016) 「『半クエスション??』の諸相—20年後の考察—」現代日本語研究会, 遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子(編)『談話資料 日常生活のことば』ひつじ書房, 275-294.
- 佐々木香織 (2004) 『日本語音声談話の韻律構造』(東京外国語大学博士論文)  
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/35612>
- 清水康行 (2011) 「欧米の録音アーカイブズ—初期日本語録音資料所蔵機関を中心に—」『国文目白』(日本女子大学) 50, 29-19.
- 陣内正敬 (1998) 『日本語の現在—揺れる言葉の正体を探る』アルク.
- 神保格 (1929) 『日本のアクセントと言葉調子』(レコード) コロムビア 33000~4, 日本語教育学会編『戦前戦中の日本語教育教材レコード復刻版』凡人社 2003年所収.
- 高田早苗 (1929) 『新皇室主義』(レコード) コロムビア 25521, 「SP 盤貴重音源『岡田コレクション』学術研究用デジタル音源集』エービーピー・カンパニー, 2010年所収.
- 田中章夫 (1973) 「終助詞と間投助詞」『品詞別日本文法講座9 助詞』209-247, 明治書院.
- 田中ゆかり (1993) 「『とびはねイントネーション』の使用とイメージ」『日本方言研究会第56回研究発表会発表原稿集』59-68.
- 田中ゆかり (2010) 『首都圏における言語動態の研究』笠間書院.
- 谷口未希 (2008) 「PNLPとよばれる音調変化の実態調査—日本語話し言葉コーパスを資料として」『大阪大学言語文化学』17, 253-262.
- 登張真穂・名尾典子・首藤敏元・大山智子・木村あやの (2015) 「多面的協調性尺度の作成と大学生の協調性」『人間科学研究』(文教大学) 37, 151-164.
- 野呂幾久子 (1998) 「中途上がりイントネーションの談話における機能について」『Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka)』(中部言語学会) 5, 50-63.
- 野呂幾久子 (2001) 「中途上がりイントネーションに対する聞き手の印象」『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇』51, 123-132.
- 橋本典尚 (2002) 「『ネサヨ運動』とその周辺」『東洋大学大学院紀要』39, 250-238.
- 平地恩 (2008) 「新しい音声表現の研究—アクセント・イントネーションによる情報付加に注目して—」『文化環境研究』(長崎大学) 2, 30-39.
- 文化庁 (1980) 『話し言葉』(「ことば」シリーズ12) 大蔵省印刷局.

文化庁（2000）『平成11年度国語に関する世論調査』大蔵省印刷局。

前川喜久雄（2011）「PNLPの音声的形状と言語的機能」『音声研究』15(1), 16-28.